

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：25405

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780129

研究課題名(和文)1710年代ブリテン社会思想の同時代言説史的考察

研究課題名(英文)An Inquiry into the 1710s British Social Thought in the Contemporary History of Discourse

研究代表者

林 直樹 (HAYASHI, NAOKI)

尾道市立大学・経済情報学部・准教授

研究者番号：50713773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1710年代およびその前後のブリテン社会思想の展開を、同時代の著述家たちの問題意識のうえに映じた社会の諸相を時代背景と照らし合わせながら逐一把握することで、明確化することを試みた。主な成果として、次の2点を挙げることができる。

1) 1720年に「世界史上最初の国際バブル事件」と評されるロー・システムおよび南海企画の破綻が生じたことは周知であるが、その歴史的意義を、同時代史のかつミクロな論争を内在的に検討するなかで再評価しえたこと。

2) 1720年代以降のブリテンが「帝国」化していくうえでの前提条件としてきわめて重要な1707年合邦を取り巻く同時代史および前史を、深く掘り下げられたこと。

研究成果の概要(英文)：In this research I have tried to clarify how the British social thought in around 1710s built up itself by grasping the several aspects of the society which were reflected upon the critical consciousness of the contemporary British thinkers or authors. Following two can be referred as its chief outcomes:

1) It is well-known that both the Law's System and the South Sea Scheme which can be called the "first international bubble in world history" collapsed in 1720 but their historical significance has been scarcely ever considered within the micro-contexts or the contemporary debates themselves; I have examined the aspect of the matter by using the method of synchronic approach and reassessed its historical range.

2) I have deeply examined the contemporary history of the Union of 1707 as well as its prehistory, both of which were very important as the necessary precondition for the formation of the British "Empire" after 1720s.

研究分野：社会思想史・経済学説史

キーワード：デフォー 思想史 ブリテン史 文脈主義 バブル 合邦論争 帝国 近代化

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、ダニエル・デフォー(1660~1731年)の言説の軌跡を同時代史的に追跡することにより、初期近代、とりわけ17世紀末から18世紀前半までのイングランド社会思想(政治・経済から広く文化まで)の特徴を把握しようと努めてきた。この研究では、1720年に生じた南海泡沫事件をごく短期間で收拾し、いわゆる「財政金融国家」として、見方を変えれば近代の「帝国」として、その歩みを開始するにいたる直前の時期のイングランド社会の様相を、思想史における共時的接近方法、すなわち同時代の著述家自身が抱いていた問題意識を時代背景に即して取り出す手法を用いることで、具体的事件に焦点を合わせつつ明らかにしようとしている。

近年、イングランドを震源とするEU離脱問題、その遠因の一つをなし、また帰結の一つをもなすスコットランド独立問題、さらには近い将来再燃が予想される北アイルランド問題など、領域統合の道を見失わせるかのような出来事が連鎖するなかで、1689年の名誉革命以来まさしく「近代化」事業に最初に着手し、政治経済あるいは社会のトップランナーとしてその後数百年にわたり陰に陽に世界を牽引してきたブリテンが、いまやその長期的な変化の過程ないし趨勢自体を重荷と捉え、自らの従前の歩みに背を向けて転回しつつあるように見える。これを仮に「近代の終焉」と呼ぶにしても、その意味するところを一言することは容易ではなく、矮小化された近代像を持ち出して軽々しく「ポスト近代」を唱えることは禁欲せねばならない。近代の終着点は、その始原を捉え返すことで、そしてそれをふまえて改めてその先を展望ないし遠望するという迂回路をあえて採ることで始めて、明確に見通すことのできるものだろう。このような問題意識のもと、本研究は開始された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ブリテン思想史上きわめて重要な画期と目されながら、これまで必ずしも十全にその全体像が提示されてはこなかった1710年代およびその前後のイングランド社会思想の展開を、できるだけ多面的かつ多層的に明らかにすることである。そのための手段として、本研究では、デフォーによる諸著作を同時代の様々な論客による諸著作とともに分析対象として取り上げ、それら相互の言説史的な交錯を同時代史的に活写する。

1710年代のブリテンは、トーリとウィッグという対立軸のみならず、カントリとコートのもまた、互いに激しく揺れ動きつつ複雑に交錯する思想空間を抱えていた。1720年代以降のブリテンが「ウォルポールの平和」と形容される政情の相対的安定期を現出したのとまさしく対照的に、打ち続く対

フランス戦争のなかで前例なき規模にまで急速に累積した国家債務をめぐる経済面の混乱と、ハノーヴァー家による王位継承の前後に展開された政治舞台上の駆け引きのめまぐるしさが、1710年代のブリテン社会思想に際立った浮動性を付与していると言える。この浮動性の背後に、隣国にして大国であるフランスとの関係をいかに構築するかという、国際政治経済のあるべき姿をめぐる切実な問題意識が横たわっていたことは確実である。経済史家 Julian Hoppit が指摘するように、名誉革命以来ほぼ間断なく交戦相手であり続けた隣国に対する畏怖と警戒を考慮に入れずには、ブリテンに「ローのシステム」と類似の機構が導入されて「バブル」を招来するにいたるまでの史的背景および動因を適切に読み解くことはできない。このことは「思想」が「利害」に対して持つ影響力の大きさを十二分に示唆している。

思想分析は利害分析と異なって定量化にそぐわないため、しばしば恣意的になりがちな面があることは否めない。だが、利害から思想への一方的影響関係のもとにおいてではなく、利害と思想の相互影響関係のもとで歴史を考察・考究することの重要性は、単に歴史家ばかりが強調しているわけではない(例えば Joel Mokyr を見よ)。したがって研究代表者は、1710年代およびその前後を通じて数多の小冊子や雑誌上で時事評論を書き連ねたデフォーによる思索の軌跡を道標に、初期近代ブリテン思想史上きわめて多様な理念が発露した画期と言えるこの時代の様相を、同時代言説史の観点から複眼的かつ総合的に明らかにしたいと考えた。

## 3. 研究の方法

本研究が採用する「同時代言説史的」手法とは、当該年代における政治的経済的あるいはより広く社会的背景とのあいだで相互作用を繰り返しながら自らの問題を追求した思想家ないし著述家たちの営為をそれ自体として取り出すことに、第一義的価値を置いたものである。つまりは、予断をできるだけ排して彼らの振舞いを追跡し、彼らの視野を媒介とすることで同時代の諸相を具体的に切り取ることを目指す。彼ら自身が直面していた問題とは何かを、後世に措定された価値判断を先行させることなく、同時代における言説および理念の流れ、さらにはより実体的かつ制度的な出来事の流れとの相互比較において描き出そうとする点が、この手法の特徴である。もちろん、こうして取り出された同時代史的ヴィジョンがどの程度偏向しているかをその後の研究蓄積をふまえて精査する「検証」の手続きを省略してよいなどと主張するものではない。

よりテクニカルな水準の事柄に関しては、次のように述べることができる。

まず一次史料の入手方法を述べよう。デフォーの公刊著作は校訂版『全集』(ピッカリ

ング社，44巻+18巻)を利用でき，その他比較的マイナーな著述家の諸著作や新聞雑誌の類についても，国内の拠点大学を中心に近年導入が進んでいる「ゴールドスミス＝クレス文庫」電子版，「18世紀刊本文献集成」電子版，「近世近代イギリス新聞アーカイブ」電子版等のデータベースを活用することで，網羅的な収集が可能である。手稿など未公刊資料に関してはブリテン本国から入手せねばならないが，主に刊本を対象にした研究を進めていくかぎりにおいて，この点は障壁にならない。

#### 4. 研究成果

時系列に沿って研究経過および成果を記述しておくならば，次の通りとなる。

平成26年度においては，まず資料の収集に努めた。先の3にも記載した校訂版『デフォー全集』を入手することで研究基盤を整備し，特にデフォー著『大ブリテン合邦史』(1709年)の検討作業に取り組んだ。また，「ローのシステム」および南海企画が崩壊した(1720年)直後にブリテンで生じた信用論争に着目することで，1710年代を通じたデフォーの著述活動の終局において発現した「バブル」との格闘という，いわゆる狭義の「デフォー研究」においては注目されてこなかった史実を掘り下げた。

平成27年度においては，前年度に引き続き『合邦史』を綿密に検討するとともに，本研究の方向性を見定め，かつ視座を深化させるため，啓蒙研究の方法論に関する先行諸研究の比較検討を実施した。また，前年度より引き継いだ信用制度研究をさらに進めることで，同時期におけるデフォー思想(ひいてはブリテン社会思想の代表的一側面)の軌跡を，いわば1710年代の始点と終点から挟み込むようにして踏査することができた。

最終年度に当たる平成28年度においては，広く同君連合(1603年)後の合邦論争にも目配りしつつ，上記『合邦史』の検討作業を総括した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

林直樹，ミシシッピ・バブル後のブリテン  
ジョン・ロー来訪をめぐる信用論争，  
坂本達哉・長尾伸一編『徳・商業・文明社会』  
京都大学学術出版会，査読無，2015年，  
59～81頁。

林直樹，ダニエル・デフォー「ブリテン諸  
連合史」(1)，『尾道市立大学経済情報論  
集』，査読無，15巻1号，2015年，  
41～82頁。

林直樹，イングランド啓蒙とは何か，『尾  
道市立大学経済情報論集』，査読無，16  
巻1号，2016年，85～103頁。

林直樹，ダニエル・デフォー「ブリテン諸  
連合史」(2)，『尾道市立大学経済情報論  
集』，査読無，16巻2号，2016年，  
51～100頁。

林直樹，ベイコンと同君連合，『マルサス  
学会年報』，査読有，26号，2017年，  
31～53頁。

〔学会発表〕(計 8件)

林直樹，イングランド啓蒙 いわゆる「デ  
フォーの時代」を中心に，社会思想史学会  
39回大会，明治大学，2014年10月  
26日。

林直樹，歴史叙述の二類型，マルサス学会  
25回大会，弘前大学，2015年6月2  
8日。

林直樹，ミシシッピ・バブル後のブリテン  
ジョン・ロー来訪をめぐる信用論争，  
経済社会学会51回大会，京都学園大学，  
2015年9月27日。

林直樹，一ノ瀬佳也「F・ハチスンにおけ  
る市民的関係の形成とその政治的課題」  
松本哲人「イングランド啓蒙における宗  
教・経済・政治 ジョサイア・タッカー  
を中心に」両報告に対する質疑など，社会  
思想史学会40回大会，関西大学，201  
5年11月8日。

林直樹，デフォー『コメンテーター』にお  
ける1720年バブル，経済学史学会西南  
部会120回例会，尾道市立大学，201  
5年12月5日。

林直樹，A Reply to Maria P. Paganelli, Adam  
Smith and Economic Development: theory and  
practice，経済学史学会80回大会，東北大  
学，2016年5月21日。

林直樹，ベイコンと同君連合，マルサス学  
会26回大会，徳島文理大学，2016年  
7月2日。

林直樹，イングランド初期啓蒙思想におけ  
る戦争と平和 ベイコンとブリテン合邦，  
社会思想史学会41回大会，中央大学，2  
016年10月30日。

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

researchmap (国立研究開発法人科学技術振興  
機構提供) の研究者個人ページ

<http://researchmap.jp/read0152716>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

林 直樹 (HAYASHI, Naoki)

尾道市立大学・経済情報学部・准教授

研究者番号：50713773

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )